

仁左衛門、一世二代の知盛

長谷川 修

歌舞伎座の二月公演の第二部は、「義経千本桜」の「渡海屋・大物浦」の段（通称「碓の知盛」）で、脇題に「片岡仁左衛門一世二代にて相勤め申し候」とあった。一世一代とは、歌舞伎用語では生涯の当たり役を演じ納めとすることである。七七歳の仁左衛門にとって、知盛の衣装は二十kg近くあり、本興行を一ヶ月間続けるには体力に自信がないとのことだ。（偶然にも同じ二月の日生劇場は、松本白鸚七九歳の「ラ・マンチャの男」のファイナル公演だった。）

仁左衛門の「碓の知盛」を観る機会はもうなくなるのかと思ひ、都民劇場の半額割引の抽選に申し込んだところ、幸運にも千穉楽のチケットが当たり最終公演を観ることができた。

「碓の知盛」は、壇の浦で討ち死した平知盛が、怨霊となって源氏に立ち向かう話で、最期に幼い安徳天皇を義経に託し、自らは大きく重い碓を体に巻いて海へダイブするという、悲壮な物語だ。口跡が良い仁左衛門の知盛は血まみれの大熱演であったが、脇を固める義経役の時蔵の温情、典侍局役の孝太郎の悲哀もきちんと表現され、良いアンサンブルだった。

歌舞伎座のコロナ対策は徹底しており、観客は定員の七割、座席での飲食禁止、掛け声も禁止で拍手のみと、上品で淋しいものだ。しかし、花道の出入りや山場になると、大向こうから「松嶋屋あー」「大松嶋」の掛け声が、私の空耳には届いた。

最後の幕が下りると誰も席を立たず、拍手が続く。何かあると五分ほど待つと、化粧を落とし着流し姿の仁左衛門が登場し挨拶をしたが、歌舞伎座でのアンコールは私にとって初めてだった。

思えば、昨年一月に亡くなった吉右衛門も「碓の知盛」を持ち役としていた。吉右衛門亡き後の歌舞伎界で、座頭が務まる「立役」は、白鸚、仁左衛門の二人だけになった。四十代の幸四郎、猿之助、海老蔵たちの今後の成長に期待すること大である。それにしても、丁度この間を繋ぐ世代であった勘三郎と三津五郎の、五十代での死は悔やまれる。